



山梨県鳴沢村にある施設「山梨RC（ロボットセンター）」



研究環境を重視 技術者集団ならではの

ダイナックスは昨年、東京都府中市の本社近くに研究開発拠点「府中開発センター」を新設、本社とやはり近隣にある「府中Lab（ラボ）」とに分散していた研究開発担当者を一堂に会せるようにした。同社はこのほか、大阪市住吉区にも事業所と開発センターを構えている。

さらに、もう一つ、山梨県鳴沢村にも「山梨RC（ロボットセンター）」と呼ぶ施設があり、従業員45人という規模の割には、オフィスが多い。

これには、技術者集団として戦い続けるために、良好な研究開発環境を整えていこうという発想と同時に、渡辺福徳社

長が個人で取得した物件を会社に貸与するという形をとることで、会社の資金繰りを少しでも楽にしていこうというベンチャー企業ならではの考えがあるようだ。

第4の拠点として2005年に新設した「山梨RC」は当初、小型ロボットの研究開発拠点として使う予定だった。とこ

ろが、富士山を望む河口湖畔という風光明媚な地にあるだけに、社員の研修や保養、来賓の接待などにも使われるようになり、名称の「RC」はロボットのセンターというだけでなく、レクリエーションやリサーチ、リソースなどのセンターも意味するようになったのだという。

大のマラソンファン 260回完走

「私のマラソンは観光。ロスの裏通りとか、マラソンコースを走らなければ見られないような景色を見て走るのが好きなんです」

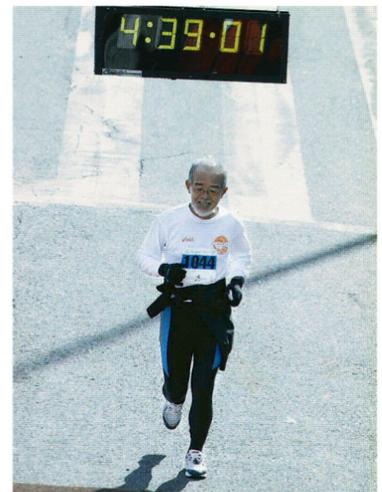
渡辺福徳社長は大のマラソンファン。100キロのしまなみ海道ウルトラマラソンをはじめ、フルマラソン以上の距離のレースを累計260回も完走しているというから半端ではない。国内では2つの県のレースを残すだけとなり、もっぱら海外遠征が

中心のようで、今年に入ってからはフィリピンのセブ島やドバイ、米オハイオ州、米アイオワ州で走破。年末にはウサイン・ボルトの故郷、ジャマイカでのレゲエマラソンにエントリーを予定している。

マラソンを始めたのは40代半ばになってからで、米アップルの役員たちが集団でアフリカのキリマンジャロに登ったことを知ったのがきっかけだという。

「彼らにできるなら、私にもできるはず」とキリマンジャロ登頂に挑戦することにし、事前に足腰を鍛えるためにジョギングを始めたのが病みつきとなった。

どこかのクラブに所属することもなく常に一人で行動する「一匹おおかみ」が信条。「アメリカの田舎町でフィニッシュしたあと、一人でクルマを運転して帰るのは、ちょっとつらいんですがね」と笑う。



2004年の米五輪選手選考会を兼ねたメルセデスマラソンでゴールする渡辺社長（米アラバマ州バーミングハム）

「ベンチャーの旗手」NYタイムズで紹介

ダイナックス社長、渡辺福徳氏は若き日に、日本のベンチャー企業の旗手として米ニューヨーク・タイムズ紙に2回も取り上げられている。

1回目は1983年1月9日付で、たばこを手話している大きなポーズ写真とともに、従業員13人の会社が大手を相手にロボット制御技術で競争

していると紹介された。

2回目は83年3月8日付で、林原の林原健社長（当時）、ナムコ（現バンダイナムコゲームス）創業者の中村雅哉氏とともに、組織にとらわれないで活躍する日本のビジネスマンとして紹介された。

渡辺社長のポーズ写真が掲載された1983年1月9日付①と横顔写真が掲載された同3月8日付の米ニューヨーク・タイムズ

